
過負荷（アレン・ウォーカー）と神の使徒

天空 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アレン・ウォーカー
過負荷と神の使徒

【Nコード】

N3654Z

【作者名】

天空 翼

【あらすじ】

とある過負荷マイナスの少年が手違いの事故で意識不明になってしまい元の世界に戻るまでDグレのアレン・ウォーカーに憑依する話。

「え？悪魔との戦争？それって僕がいる限り勝てないんじゃない？あれ？あの神田って男の子、面白そうだね。いいよ、転生してあげようじゃないか。」

プロローグ

ん？僕死んだ？

え？違う？

元の世界に戻るまで転生？別にいいよ、僕は過負荷だからそこから入
んで待つてるけど？

え？その世界のある人間が危険な状態？そんなの知ったこつちな
いね。

ん？この子、なんだか面白そうだね。じゃあいいよ。転生しようか。

特典？いらないよ。この能力マイナスがあれば僕は十分。
てかそれしかないしね。

悪魔かあ、僕がいる限り勝てないだろうけどいいか…

暇つぶしにはもってこいだしね。

この神田って子、特に僕を楽しませてくれそうだ。

さあ、行こうか。僕が介入マイナスしたこの物語に待つのは敗北しょうりか勝利はいはくか、
果たしてどっち…？

第一夜 「じゃあ、おやすみ。神田君（ぼくのおきにいい）」

『やれやれ、何でこんなところにあんな建物を建てたんだろうねえ
…アレンちゃん。』

「そんなの知らないよ。」

白髪の少年、アレン・ウォーカーが一人で何者かマイナスと会話していた。

「というか、何で君が登らないのさ！」

『過負荷マイナスの僕にそんなことさせるつもり？何が起こるかわからない
じゃないか。』

「調子いいんだから。」

アレンはそう呟くと再び崖を登り始めた。

「ふう、やっと着いたあ……」

『お疲れ様、もう変わっていいよ。』

「本当の主人格は僕なのに……なんで出てるだけで疲れるんだろっ……」

アレンは過負荷アレンに交代する。

「それが僕を宿す代償なんじゃない？ いいじゃないか、僕がいなくなる日は刻一刻と近づいてるんだから。」

『それはそれでなんか寂しいよ。』

過負荷アレンの後ろに半透明のアレンが浮いている。

そう、彼は二重人格なのだ。それも一つの体に過負荷マイナスと普通プラスが宿っている異常なアブノーマル。

「まあ、何と云うか……」

『話には聞いてたけど凄いなあ。エクソシスト総本部、黒の教団……』

「そっだね〜」

『なんか楽しそうじゃない？』

「別に〜あ、やっぱり楽しいかも。楽しくて楽しくて

とてもつまらないや。」

『…っ』

ゾクリッ

アレンの意識体を悪寒が襲う。

「あ、ゴメンね。怖がらせちゃった？」

『ちょ、ちよっとだけ…っ』

「はやくこの性格マユナスも制御できるようにしなきゃね〜」

儂い笑みを浮かべながら過負荷アレンは自分の手の平を見つめる。

『でもアクマにも有効な過負荷マイナスは教団も頼りにするんじゃないかな？僕も何回それで助けられたか…』

「でもこの力があるせいで君は不幸なんだよ？長い間自分の体を僕マイナスに貸してなきやダメだし。」

『でも今は桜麻だって立派な僕の家族だよ。』

「ありがとうねアレン。」

桜麻と呼ばれた過負荷アレンはにっこりと今までの儂い笑顔とはまったく別の笑顔をアレンに向ける。

『……………本当は離れたくないんだ（ボソッ）』

「なに？」

『な、何でもないよ！（そんなこと言ったらきつと桜麻は困る…）』

「じゃあ、いくよ。すみませーん！クロス・マリアン元帥の紹介で来たアレン・ウォーカーです！紹介状が来てると思うんで疑うのならそちらを参照にー！コムイのやつならきつと埋もれてるだろうとか言っていましたんで念入りにー！あと、神田って男の子と戦わせてくださいーい！」

ニコニコ笑いながら言う過負荷アレンにモニター越しの全員が悪寒を感じたのは彼が過負荷マイナスだからである。その後、なんやかんやで過負荷アレンは教団へと無事入団したのである。

「やあ、神田。」

ニコニコと過^{アレ}負荷は自室に戻ろうとした神田に声をかける。

「なんだモヤシ。」

「モヤシかあ、過^{ほく}負荷にはピッタリだけどアレ^ンには相応しくないあだ名だね〜」

「…何なんだ…っ!？」

神田の体がくすむ。

「？」

儂い笑みを浮かべた過^{アレ}負荷は首を傾げる。

「お、お前は…何なんだ…?」

声が震える。

神田を襲った恐怖という感情の原因は間違いなく過^{アレ}負荷だった。

「僕ですか？神田は変なことを聞くなあ。僕はアレ^ン・ウォーカー…君の言うモヤシだよ?」

「違う」「そして過^{マイ}負荷だ。」「ま、過^{マイ}負荷…?」

「そつ。何言ってるかわからないって顔してるね。まあ僕は君達とは違って最高を最低と思ってる人間だからね。知ってたから僕を調べればいい。僕は君を気に入ってるからね…じゃあ、おやすみ。神田君。」

そう言つと過^{アレ}負荷は自室へと入つていった。
重苦しい空気が開放された神田はその場に情けなくずるとへ
たり込んだ。

呼吸が苦しい、あの息苦しさが今も残つてる…

しかし、知りたい…。あいつのことが…何故俺をお気に入りと呼ん
だのか…

神田は思う。

それこそが自分自身を過^{マイ}負荷の領域へ踏み込ませてしまふ第一歩だ
つたとも気づかず…

「ああ、待ちきれない…はやく僕と同^{マイ}類になつてくれよ、神^お田…」

第一夜 「じゃあ、おやすみ。神田君（ぼくのおきにいり）」（後書き）

次回 マテールの亡霊？亡霊なんてまさに過負荷マイナスの僕にピッ
タリだね。

第二夜 「マテルの亡霊?亡霊なんてまさに過負荷(マイナス)の僕にピッタ

朝ごはんを食べに来た過負荷^{アレ}はアレんに代わる。

「は、初めまして!アレん・ウオーカーです!」

「礼儀正しい子ね〜アタシ、何でも作っちゃうわよ?」

「何でもですか…」

『来るな〜アレんのアレが…』

「じゃあ、グラタンとポテトとドライカレー、マボー豆腐とビーフシチューと……後デザートにマンゴープリンとみたらし団子20本!」

「彼方、そんなに食べるの…?」

後ろで過負荷^{アレ}が苦笑いをしている。

「なんだと!?!もういっぺん言ってみやがれ!」

「おい、やめろ!」

『何かあったようだね…』

「うん。」

アレんは見に行く。

「うるせえな、食うときに後ろでメソメソ死んだやつの話なんかさ
れちゃ飯がまずくなる。」

『あ、アレン。僕に代わってくれないかな?』

「え?う、うん。」

『ありがとう、食えるときは変わるからね。』

アレンは過^{アレ}負荷に交代する。

「神田君、いい加減に……」

「何だ新入り、俺に何か言いたいのか?」

「素直になつたらどうですか?」

「「「は?」「」」

全員が固まった。

「だって神田君って後ろで死んだ人のこと言っただけじゃないんでしょ?これってつまりあれでしょ?神田君も本当は悲しくて泣いちゃいそうでそれを自分是我慢してるのに他の人が泣いてるのが気に入らない……つまり泣かずに敵^{かたき}である千年伯爵を倒そうって言いたいでしょ?」

「お、おいてめっ「そして死んだ仲間の無念を晴らそう!そう言いたいでしょ?本当は神田君も昨日ベッドでメソメソ泣いてたんじ

やない？悲しくって辛くって、だって目が赤いよ？だから仲間に泣かずに千年伯爵と戦おう！そして仲間の無念を晴らそう！直訳するところいうことを言いたいんでしょ？」勝手に「そういうことだったのか！」「は？」

「すまねえ、お前の本心を知らずに……」

「そうだな！いつまでも悲しんでないで千年伯爵を倒して敵をとるぞ！」

「ああ！」

「」「おおー！」「」

「ほら！神田君も！」

「お、おおー……」

神田も回りに流され拳を突き上げた。

『す、凄い……さすが師匠の舌をも巻かせたマシンガントーク……』

「ああ、神田！アレン！任務だぞー！」

「はい！てなわけでアレン、僕が任務聞いてからご飯でいい？」

『うん！』

(こいつ……まるでもう一人の自分と喋ってるみてえだ……)

そして

「よもや神田ちゃんと同じ任務に就くとはね、僕ら何か縁があるのかな？」

「うるせえ。ちゃんづけすんな。」

儂い笑顔を浮かべながら言う過^{アレ}負荷に神田はそう返す。

「ゴメンね。僕の癖なんだ。こういつの。」

「直せ。」

「手厳しいな。ね、アレンちゃん…」

『アハハハハハ…（汗）』

過負荷^{アレ}はボソリとアレンに呟く。

それにアレンは苦笑いするだけだった。

実はこの組み合わせ、神田の要望だった（秘密裏）。

彼は過負荷^{アレ}の言った過負荷^{マイナス}のことを知りたいがゆえの選択だった。

マテール

「ここがマテールかあ。過負荷マイナスの僕にはピッタリの町だね」

『そんなこと言わないでよ悲しいから。』

「そうかな？僕はなんともないけど、というかいつものことだし。」

『僕からしたら悲しいんだ！』

「そっか、アレンちゃんは普通ノーマルだもんね。じゃあ気をつけるよ、アレンちゃんを泣かしちゃせつかく体を貸してもらってるのに悪いし」

「何ぶつぶつ言ってるんだ。」

神田の言葉に顔を上げいつもの儂い笑みを浮かべる過負荷アレン。

「アハハハ、なんでもないよ」

「そうか、しかし…探索部隊ファインダーが全滅か…」

「うん。それだけ強いアクマだいるんだよね。」

ジャンプとか少年漫画の主人公ならここで怒るんだろうけど残念ながら僕マイナスにそんな情はないんだよね。と考えまた儂い笑顔を浮かべる過負荷アレン。

『気をつけて桜麻、ここ嫌な感じがする…悲しくて泣いてるような』

…』

「ううーん、たしかにマイナスな感じはするねえ。神田君、気をつ

けてねー。」

「お前も来んだよ!」

「あ、そう? まあ、ここにいるアクマに僕の絶望歌デスパレットソングスが効くかが問題
なんだけどね。」

「絶望歌? お前のイノセンスの名前なのか?」
デスパレットソングス

「違うよ神田君。これは僕のイノセンスの名前じゃない。僕の過負マイ
荷ナスだよ。」

神田は眉を寄せる。

「昨日から聞きたかったんだが、過負荷マイナスとは何だ…?」

「あ、うん。過負荷マイナスってのはね…あ、神田君。あつちで爆発が起き
たよ。」

「なに!?! くっそ、話は帰ったらじっくり聞かせてもらっからな!」

「はいはい」

仮面の笑みを浮かべ過負荷アレは神田と走った。

第二夜 「マテールの亡霊? 亡霊なんてまさに過負荷(マイナス)の僕にピッタ

よ 次回 へえ、面白い能力だね。でも僕の絶望歌には効かない
デスパレットソングス

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3654z/>

過負荷（アレン・ウォーカー）と神の使徒

2011年12月14日21時47分発行